

青梅市文化財ニュース

第 2 1 3 号

平成 1 7 年 7 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館

(青梅市駒木町 1-684 0428-23-6859)

紙の移り変わり

私たちの生活に欠くことのできない紙の起源は、およそ 5 0 0 0 年前エジプトで使われていた「パピルス」で、後に英語の「Paper」の語源になったと言われていますが、現在の植物繊維から作る紙とは少し違っていたようです。

現在の紙は、繭を絹糸にする過程で生じる繊維屑を集めて叩きほぐし、水中の網の上で竹竿を叩きながら洗った作業後の網には、細かな繊維の断片が薄い層となって残り、これを乾かしてできた薄い膜が原型といわれ、これが最初に「紙」と呼ばれたと、中国最古の辞書といわれる「説文解字」に書かれています。そして、中国後漢時代（A.D. 100～200）の歴史書「後漢書」にも『古くから書物は多く竹簡を以って編み、絹布を使った物を紙としていたが、絹は貴く簡は重く皆不便であったが、蔡倫は樹皮、麻頭、布、魚網などを用いて紙とした。元興元年（105）にこれを和帝に奏上し、帝はこれを喜び、もっぱら使用した。それで天下みな蔡侯紙と称した。』とあります。この紙はやがて中国全土から交易などを通じ近隣諸国へと伝播していきました。

日本に紙の製造法が伝わったのは、610年高句麗の僧「曇徴（どんちょう）」によるものとされています。聖徳太子は仏教を広め、写経を奨励する為に製紙術を改良し、楮（こうぞ）を増産したと伝えられています。701年に大宝律令が制定され、その中に「図書寮」を置き政府文書の保管と国史の編集を行なうことが定められ、造紙所も置かれました。710年に都を奈良に移した時にも図書寮製紙所が置かれ、付属の紙屋院（公用紙を作る所）も出来ました。正倉院文書によると、宝亀5年（775）、図書寮解「諸国未進紙並筆事」の条に「武蔵紙480張・筆50管」とあるように8世紀には武蔵国からも大量の紙を寄進した事が分かります。平安時代になると紙は写経だけではなく、貴族の間で行われた和歌、漢文、書などに用いられるようになり、質のよくない紙から薄い紙屋文様のある紙、墨流しなどの美しい良質の雁皮紙（がんぴし）の利用が多くなっていきます。

鎌倉時代になると紙は、障子、襖、傘など生活の中に入り込んできました。室町時代には紙を売る市が美濃で始まり、古紙を売る業者も出てきましたが、紙は高価で上流階級の人たちしかまだまだ使えませんでした。江戸時代になると経済力を増した町人が地方紙の売買に活躍し、戦国諸侯が自国領の産業振興に力を入れて、生活必需品としての紙の増産を育成した為に全国至る所で和紙が漉（す）かれました。江戸の幕藩体制のもとで諸藩は競って製紙

（裏面に続く）

を財源の一つとして奨励しました。和紙のカタログとも言うべき「紙普」、
「新撰紙鑑」や「紙漉大概」、「紙漉重宝記」など紙漉きの本も出版される様になりました。農学者宮崎安貞は、その著「農業全書」の中で、茶、楮、漆、桑を農家に大切な『4木』として教え、副業に和紙を漉くことを勧めました。それにもなって紙を利用する職業も傘屋、提灯屋、障子屋、造花屋など様々に渡り生活に欠かせない材料になっていき、文化面でも紙の需要は高まり瓦版、浮世絵、かるたなどに用いられ製紙品は家庭内に満ちて和紙は黄金時代を迎えます。埼玉県小川町の「和紙の歴史」の中に「紙干しが好天気恵まれると『ぴっかり千両』と言われた」と書かれています。其の言葉からも当時の盛況ぶりが窺えます。

明治時代になっても和紙をふんだんに使用していた我が国では、こと紙に関しては何の不自由もありませんでしたが、洋式の活版印刷と木材パルプを原料とする機械製紙（洋紙）の技術は文明開化を進める上では大きな魅力でした。先ず広島藩主、浅野長勲（あさのながこと）が洋紙の将来を見通し、又、旧藩士族の生活を支える為に「有恒社」を設立し、創業を始めたのが明治7年（1874）の事でした。それに前後して東京・大阪・神戸・京都でも創立されました。当時の粗雑の洋紙は良質の和紙に慣れ親しんだ人々には、あまり好まれず業績は芳しい物ではありませんでしたが、しだいに技術は改良され向上していきました。明治36年（1903）に文部省が国定教科書の用紙に固執してきた手漉き和紙から洋紙に切替えた事が一つのきっかけになり、和紙は洋紙に押され減少し、現在では手漉き和紙を作っている所は、ごく僅かになってしまいました。

大正から昭和にかけて現在のように新聞が各家庭で読まれるようになり、多くの本も出版されるようになって文化水準も高くなりました。また、その他にも紙幣・包装紙・装飾用などたくさんの紙が使われるようになり、印刷工業と共に製紙工業も大いに発達したのです。そして第二次世界大戦後、人々の暮らしが豊かになると共に製紙技術もいっそう発達し、現在日本は世界でもトップクラスの技術をもつ、世界第2位の紙の生産国になっています。

参考文献『紙と日本文化』

『和紙のふるさと小川町』

『紙の文化誌』

（文責 儘田小夜子）